

「売られる」ことが「普通」の国で。

# 西アフリカ 人身売買の被害者たち

サハラ以南のアフリカでは、未だ子どもの人身売買や強制労働が後を絶たない。

多くの子どもたちが家族の手によって売られ、奴隷や娼婦として働かされる。

人身売買の実態と、子どもたちを救おうとする人々によって作られた

シェルターに集う、子どもたちの今。

ここに紹介するようなシェルターに保護される子どもたちは、

人身売買被害者のうちの、ほんの一握りである。

写真・文 / アナ・パラシオス

Photo and Text by Ana PALACIOS



保護シェルターに辿り着き、ようやく安心して休める寝床を見つけた子どもたち。ここに来る子どもたちはみな、シェルターに来る前は児童労働や暴行、性的虐待の被害にあっていた。カラ、トーゴ。  
2016年11月16日





NGOが運営する人身売買や性的虐待を受けた子どものためのシェルターに着いたばかりの少女。ショックを受けていて、カウンセラーに自分の身に起きたことを伝えることができない。彼女はその後妊娠や性感染症の検査を受ける予定だ。ロメ、トーゴ。2016年12月9日



この15歳の少女には両親がいない。雇い主の家で食事や寝床と引き換えに働いている。センターのマネージャーが女主人と交渉し、今は数日間に2時間だけ学校に通うことが許されている。読み書きができないと搾取から逃れることは難しい。ロメ、トーゴ。2016年12月5日



この幼い3人の少女、ジュリエットとベラ、ジャスティンはみんな奴隷として市場で働いている。自由になれるわずかな時間を使ってこのセンターに通い、読み書きを学んでいる。センターでは、子どもを奴隷として「所有」する店の経営者にも識字教育をおこなうことで、子どもたちがセンターに通い学ぶことへの合意を得ている。ロメ、トーゴ。2016年11月29日

## 貧困が生む 人身売買

国際労働機関（ILO）の2017年の報告書によれば、世界の児童労働者は1億5200万人。2000年には2億4600万人だったのが、6割近くは減ったことになる。大きな躍進ではあるが、ILOの掲げる児童労働撤廃からはほど遠い。ちなみに、ILOによると、児童労働とは、本来義務教育を受けるべき5歳以上15歳未満（途上国は14歳未満）の子どもが教育を受けずに大人のように働くこと、18歳未満の子どもが危険または健康に有害な労働をすることをいう。

注目したいのは、その児童労働者のうち、約半分の7200万人がアフリカにおり、さらにそのうち5000万人が西アフリカなどサハラ以南に集中していることだ。とりわけ西アフリカのギニア湾に面したベナン、トーゴなどでは子どもの人身売買が多発している。この2か国は、近隣諸国と比べて、国民の年間所得が際立って低い。

ベナンやトーゴの何千人もの子どもたちは、30ドルかそこらのわずかなお金で、家族によって売られる。大人たちは「子どもを売る」ことを普段でも話題にするし、特別のこととは思っていない。「よりよい生活が送れる」「学校に行ける」など、貧困にあえぐ人々は、仲介業者の甘い言葉にそそのかされる。エイズ孤児が、親類の間をたらいまわ

しにされた挙句に売られることもある。ベナンのエイズ感染率は2パーセント前後と西アフリカのなかでは高くはないが、それでもエイズ孤児と呼ばれる子どもは、人口1000万人のこの国に4万人から7万人いる。さらに14〜15歳になると、「お金がたぐさんたる」 「女中が必要だ」などと誘われて、子どもが自ら人身売買の罠にはまることもある。仲介業者は遠縁のおばさんや友人の知り合いを名乗ったりして信用させるのだ。

子どもたちが送られるのは、東隣のナイジェリア、その先のカメルーン、あるいは西側のコートジボワールなど。岩石採石場や農場、カカオやコーヒー豆のプランテーション、商店、それに最悪の場合は売春宿や戦場が彼らを待ち構えている。子どもたちは生まれ故郷や家族から切り離され、言葉もわからない場所できき使われ、やがて精神を病んでしまうことも多い。

例えば、ヒューマンライツウォッチの報告書に、トーゴからナイジェリアに売られた男の子たちの話がある。彼らは1日13時間も藪や草刈りをしたり、種を蒔いたり、畑を耕したという。「疲れた」というと殴られた。2年ほどたつと自転車を渡され、トーゴに帰るように言われた。しかし国境で警備兵にお金をまきあげられ、山賊に自転車や食物を奪われ、何人かは途中で死んでしまったという。他のケースでも、どの子も満足な食事





夜寝る前のルームメイトとの幸せな時間。部族の伝統で強制結婚させられそうになり、自力で逃げ出したところを保護された11歳の女の子と、義父に食べ物もなく与えられずに働かされていた9歳の女の子。カラ、トーゴ。2016年11月15日



12歳のインディゴが、センターの遊び場に大好きなスーパーヒーローの絵を描き、遊んでいる。彼は、父親によってナイジェリアに送られ、そこで女性経営者に「売り渡された」。1年以上働き、最終的に虐待を受けて女性から逃げ出したインディゴは、警察に引き渡されてベナンに帰国し、このセンターでようやく子どもに戻ることができた。コトヌー、ベナン。2016年2月11日



インディゴの父親が、息子を再び家族に迎え入れるという誓約書にサインしている。村長や村人、NGOのソーシャルワーカーが証人となって、父親が再び少年を売らないように監督する。ベナン。2016年2月5日

をさせてもらえず、朝から晩まで働かされ、驚くほどの低賃金かまったく賃金を与えられず、虐待同然の扱いを受けている。次々と売り渡され、最終的に売春宿に送り込まれる女の子もいる。何百人もの女の子を乗せたフェリーがカメルーン沖で沈没したこともあるが、どんな場所に向かっていったのかはわかっていない。

さて、歴史をしてみると、西アフリカでは16世紀から19世紀にかけて奴隷貿易が盛んにおこなわれていた。ベナン、トーゴ、およびナイジェリア西部の沿岸は「奴隷海岸」と呼ばれ、これらの地から1千万人を超える奴隷が南北アメリカなどに「輸出」された。ベナンでは国王自らが戦争の捕虜や少数民族、政敵を売り飛ばしていたこともある。

奴隷も人身売買も、被害者の人権を甚だしく無視するもので、許されることではない。人身売買とは、人間を「売る」無責任な親、強欲な仲介業者、児童労働者を雇う雇用者、雇用者が子どもたちを使って産み出す商品やそれを買う購入者など、すべてに責任がある。まさに社会全体の問題なのだ。

人身売買による強制労働は今や毎年1500億ドル(約15兆円)の不正利益を生んでいる。それは武器売買と薬物売買と並び、もっとも利益をあげる世界の一大ビジネスとなっている。

売られた子どもたちの中には、危険な仕事だけがしたり、病気になって死んでしまったりする子もいる。脱走してそ

のままストリート・チルドレンになる子もいれば、警察やNGOに保護され、故郷に戻れる子どももいる。

こういった人身売買の悲劇の拡大を防ぐと、西アフリカの国々でも、最近ではユニセフやNGOの支援を借りながら、子どもの人身売買対策に乗り出している。ここに紹介している写真も、ユニセフの協力団体が、ベナンやトーゴの首都などで運営しているシェルターだ。ここでは、人身売買の被害者やストリート・チルドレン、遺棄された子ども、貧困家庭の子どもなどの保護にあたり、衣食住の世話から教育にも取り組んでいる。人身売買や強制結婚から自力で逃げ出した子どももいる。子どもを故郷に戻すことも進めているが、どこから来たか分からないことも多く、時間のかかる作業となる。場合によっては、里親を見つけていることもあるし、少し年齢のいった子どもだと、職業訓練をして社会的自立をうながしたりもする。これらのNGOでこれまで15277人の子どもが社会復帰を果たした。

児童労働者数を減らすのは地道な根拠を要することだが、それでも私たちは少しずつでも進まなければならない。



アナ・パラスオス  
スペイン・サラゴサ生まれ。ジャーナリスト・写真家。映画業界で働きたがら、主にアジア、アフリカ地域でドキュメンタリーを撮影。DAYS JAPAN 2016年11月号に「アルビノたちのシェルター 魔の手から逃れて」を掲載。

(構成・翻訳/野口みどり)